

原 著

1歳6か月児健康診査における萌出歯数の33年間の推移と 萌出歯数に関連した因子の検討

三好健太郎¹⁾ 高橋 大郎¹⁾ 栗田 啓子¹⁾
本郷 博久¹⁾ 竹原 順次¹⁾ 中村 公也¹⁾
三宅 亮¹⁾ 兼平 孝¹⁾ 森田 学²⁾

概要：本研究では、1歳6か月児健康診査における乳歯の萌出歯数の33年間の推移と、萌出歯数に関連する因子の解析を目的とした。対象は1980年から2012年まで北海道江別市の1歳6か月児健康診査の受診児、27,454名である。歯科健康診査と身体計測結果に基づき、男女別に、年次ごとの1人平均萌出乳歯数、16歯以上保有者割合、癒合歯保有者割合を算出し、年次との関係を回帰直線で求めた。さらに、出生年、性別、出生順位、出生体重、1歳6か月時の身長、同胸囲、癒合歯数、母親の年齢を説明変数、16歯以上萌出の有無を従属変数としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、1) 出生時体重、1歳6か月時の体重、同身長、同胸囲、1人平均萌出乳歯数、および16歯以上保有者割合は、男女とも経年的に減少した。年次(x)から1人平均萌出歯数(y)を求める回帰直線の傾きは男児-0.0188、女児-0.0181であった。2) 1人平均萌出歯数は男児が女児より多い傾向にあった。3) 癒合歯保有者割合は年々増加する傾向にあり、男児のほうが女児よりもその傾向が強かった。4) 16歯以上萌出については出生体重、1歳6か月時身長、1歳6か月時体重と有意な関連がみられた。

以上から、ここ33年間では、乳歯の萌出が遅れる傾向にあり、乳歯の萌出には児の出生体重や1歳6か月時身長、1歳6か月時体重が関連している可能性が示唆された。

索引用語：幼児健診、乳歯の萌出、成長発育

口腔衛生会誌 69：34-42, 2019

(受付：平成30年9月5日／受理：平成30年10月10日)

はじめに

1歳6か月児では成長発達の個人差が大きい¹⁾。健康診査の現場においても、歯の萌出状態、すなわち萌出順や萌出歯数を心配する保護者を見受けることがある。乳歯萌出に関する研究として、1990年代以降で海外の報告²⁻¹¹⁾はあるが、日本においては少なく^{12,13)}、最新の調査結果が望まれる。

乳歯列は児の成長ともに形成され、乳歯萌出について澤田¹⁴⁾は「僅かながら乳歯初生が早まり、上下第2乳臼歯は2歳頃に萌出する」と述べており、1980年頃では最初の乳歯が萌出する時期は生後7か月前後とされ、2歳から2歳6か月の間に上下第2乳臼歯が萌出するとされていた¹⁴⁻¹⁷⁾。近年、小児の平均出生体重や、歴齢別にみた乳幼児身体発育値の緩やかな下降がみられることから¹⁾、Woodroffeら¹⁸⁾が1964年、1984年、2003年の

調査で乳歯萌出開始時期が1984年では早まり、2003年では遅延していることを指摘しているように、乳歯の萌出時期も変化している可能性が考えられる。

今回、1歳6か月児における乳歯萌出状況を33年間にわたって観察し、萌出歯数の年次推移と萌出に影響する要因を検討した。

対象および方法

1. 対象

対象は、北海道江別市の1歳6か月児健診が開始された1980年度から2012年度までに受診した男児13,906名、女児13,548名、計27,454名である。

健診は毎月上旬と中旬の2回、それぞれの時点で18月齢になる児を対象にして実施している。事業当初からの受診率は90%前後で推移し、最近の15年間は97～99%を示している。

¹⁾ 北海道大学大学院歯学研究院口腔健康科学分野予防歯科学教室

²⁾ 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野